

ISSN 1882-9511

THE AICHI-GAKUIN JOURNAL OF PHARMACEUTICAL SCIENCES

愛知学院大学薬学会誌

Volume 12
December 2019

愛知学院大学薬学会

THE AICHI-GAKUIN SOCIETY OF
PHARMACEUTICAL SCIENCES

NAGOYA JAPAN

ISSN 1882-9511

愛知学院大学薬学会誌

第 12 卷 2019 年 12 月

THE AICHI-GAKUIN JOURNAL OF PHARMACEUTICAL SCIENCES

Volume 12 December 2019

愛知学院大学薬学会
THE AICHI-GAKUIN SOCIETY OF
PHARMACEUTICAL SCIENCES
NAGOYA JAPAN

巻 頭 言

分岐点－ターニング・ポイント

薬学部長 村木克彦

後生の人々は2019－2020年をどんな時代・年として思い起こすのか非常に興味深く思っている。「平成の30年が終わり新たな令和の始まりの時代」、「令和に開催された東京オリンピックの年」、「世界の分断がより一層進んだ時代」、などであろうか。残念ながら、今を生きる我々には捉えにくい。しかし個人的には、後生の人々は、この時代が様々な点において分岐点－ターニング・ポイントであったと捉える感覚を覚える。

未来の薬学関係者はこの時代を、「第一期の第三者評価がやっと終わったと思ったら第二期の第三者評価が始まった年」、「新薬学コアカリキュラムが完成を迎えた年」、「薬学部の入学定員割れが常態化した時代」、「3度目の薬剤師数の過剰予測が出た時代」、などと捉えるかもしれないが、これらがもたらす結果を今の我々には想定できないので、これらは単なる思いつき程度の確度しかない。しかし、今はやりの人工知能（AI）を利用すると、この確度が格段に向上する。初期データさえ入力すれば、後はAIが勝手に可能な限りのパターンで分析し、結果を予測してくれる。チェスや囲碁などの対戦競技ではAI自身が対戦を繰り返すので、ルールは別として初期対戦データさえほとんど不要である。このAIを使い、今後の日本の行く末を予測した結果が、今年早々に新聞で報道された。それによると分岐点は2025年で、どんなに初期条件を変えても、2025年まで様々な改革を先送りすると、AIは日本の行く末は暗いと予測している。薬学の分岐点は、2020年なのか2025年なのか、それとも2015年だったのか、残念ながら今の我々にはまだ分からない。個人的には、今すぐにもAIに予測させてみたいが、近未来の薬学関係者は知っており、先人を称えているか、非難しているか、何れにしても我々の責任は重い。

6年制薬学教育がスタートして約15年が経過し、6年制薬学部卒業者がおおよそ10万人になるうとしている。この10万人が全て医療職に従事しているわけではないが、6年制薬学部卒業生が医療の第一線で活躍する時機－分岐点が来ていると期待したい。

—目 次—

• 巻頭言	
分岐点ターニング・ポイント	
薬学部長 村木克彦	
• 総説	
核内受容体レチノイド X 受容体アゴニストの現在と将来	
井上 誠、中島健一、平居貴生	1
• 学会報告	
ベルベリン誘導体 13- <i>o</i> -MBB は薬剤耐性緑膿菌のアミノグリコシド系薬耐性を軽減する	
小谷謙太、森田雄二、久綱 僚、富田純子、河村好章	16
Pd 触媒下で 5 価アンチモン試薬を用いたベンゾチオフェンの β 位選択的アリール化反応	
北村有希	18
1 型糖尿病患者における FGM (Flash Glucose Monitoring) の使用感と効果	
宮澤玲帆、加藤文子、巽 康彰、武藤達也、加藤宏一	20
Amiloride as a Probe Substrate for Investigation of Organic Cation Transport System	
Chisa Kaneko, Tatsuya Kasaki, Ryosuke Nakanishi, Yuichi Uwai, Tomohiro Nabekura	22
γ -シクロデキストリンと trans, trans farnesol の包接複合体の単結晶 X 線構造解析	
肥田和也、小川法子、安永峻也、川嶋嘉明、山本浩充	23
スキルス胃癌の腹膜転移において Galectin 4 が果たす役割の解明	
浅野秀斗、森田あや美、原 敏文、武井佳史	24
• 医療生命薬学研究所	
平成 31 年度 (令和元年度) 医療生命薬学研究所組織	25
医療生命薬学助成 (プロジェクト提案型研究)	26
• 平成 30 年度医療生命薬学助成研究概要	
新奇な 15 族元素を含む複素環化合物の創薬リードとしての可能性探索	
松村実生、小幡 徹、郡司 茜、山田瑞希	30
癌転移を標的とした新しい創薬探索基盤の開発とその実践	

原 敏文、中島健一、森田あや美	32
抗肥満性ホルモン FGF21 に作用する天然物の探索と生活習慣病予防への応用	
平居貴生	34
可視光を利用したカルコゲン元素を含むイミダゾピリジン誘導体の合成法の開発	
村田裕基	36
老年期うつ病患者のコンプライアンス向上を目指した抗精神病薬の非経口製剤化	
小川法子	38
新カリキュラムにおける「知識の理解」および「知識の活用」に関する新たな評価系の確立	
波多野紀行、武田良文、茂木眞希雄	40
• 国際交流委員会活動報告	
韓国薬学研修引率報告 李 辰竜、山本清司	44
韓国薬学研修報告	
田川佳於里、國府方梨菜、林明日香	47
竹下茅咲、植家晴紀、渡邊紗里	50
上田梨奈、千葉有紀子、吉田弥礼	53
米国薬学研修引率報告 山本浩充、浦野公彦	57
米国薬学研修報告	
近藤優樹、森田海聖、亀山実希、渡邊裕菜	59
河口英史、松井直子、伊藤菜浪、高塚菜月	61
坂川彰悟、加藤未沙希、上田梨奈、山本彩加	63
• FD 委員会活動報告	
平成 30 年度薬学部 FD 委員会活動報告	65
• 卒業研究発表会優秀賞受賞者一覧	74
• 講座紹介・業績リスト	75
• 薬学部医療薬学科 10 期生卒業論文課題一覧	133
• 評議員会便り	135
• 投稿規程	154

・ 薬学会会則	156
・ 名誉会員リスト	159

協賛

編集後記